
僕は世界最高のドS！？

闇コロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕は世界最高のドS!?

【Nコード】

N5677R

【作者名】

闇コロ

【あらすじ】

真面目、優しい、健全　そんなお手本のような少年　赤松吉信
彼の前に現れた少女（美少女）北井真美。彼女は……………

プロローグ（前書き）

なんか作ってしまった…オリジナル作ってしまった…大丈夫か？俺？

プロローグ

カタカタカタカタ

一人の少女が『ある事』を調べていた。
トントン

誰かが少女の部屋のドアをノックする

「お嬢様、お茶をお持ちしました」

部屋の外から聞こえる声に少女は返事をする

「ありがとうございます、入って」

「失礼します」

ガチャ

ドアが開き一人の老紳士が部屋入ってくる。

「今日は甘めのミルクティーです」

と老紳士は少女にミルクティーを渡す

「ありがとうございますマルコ」

少女はミルクティーを一口飲みまた『ある事』を調べ初める。マルコと呼ばれた老紳士は少女のパソコンを見る

「やはりアレを実行するのですか？」

マルコは少女に聞く

「やっぱりマルコも反対？」

「とんでもございません奥様の時もそうでしたし、何よりお嬢様がご自分で決められたのです、わたくしは応援しますよ」

「ありがとうございますマルコ」

少女が言った数秒後パソコンでの結果が出る

「見つけた」

「そのようですね」

パソコンには一人の少年の顔と名前が表示された。

少年の名は

赤松 吉信 (アカマツ ヨシノブ)

普通だった日常（前書き）

ここもプロログみたいな物です

普通だった日常

チュンチュン

小鳥の囀ずりで僕は目を覚ます……………

……………なんてロマンチックな朝有るわけが無い！

僕、赤松吉信は今日も寝坊だ！

昨日買って置いたフランスパンを食べながら僕は走る、僕は妹●か

！？と頭の中で思ったがそんなこと今は気にしない、とにかく走れ！

赤松吉信！走るんだ！

まあ猛ダッシュのお陰でどうにか遅刻は免れた、でもその代わり僕は、ほぼ一日分の労力を使い果たしてもうくたくただった

「よう吉信！寝坊か？」

くたくたな僕に話し掛けてきたのは同級生の澄田^{スミタケイ}筈色黒でロン毛、背も高く、スポーツも人並み以上、気のいい人だからすぐ友達になれた

「おはようございます、筈」

僕が挨拶すると筈は

「素っ気ねーの、よっぽど疲れてんだな…」

「はい、昨日遅くまでずっと分数式やってまして…」

「ぶ、ぶぶ分数式い！？そのノリなら普通ゲームとかだろ！真面目過ぎんだよお前は」

「そんなこと言われましても…僕、ゲームは苦手ですて…」

「苦手ってのはよう克服する為にあんだよ　それから敬語は止せ」

「敬語はどーも癖みたいでして」

「口答えすんなあ」

ズドワッ

「あー」

笄の蹴りで僕は飛んでった。

キンコンカンコン

もうマンネリ化しているチャイム略してマンイムが鳴り今日の授業は終了、僕と笄は部活に入って無いので二人で帰る事にした、帰宅中、黒いスーツのいかにもエージェンツ的な男が何かを探している様にあっち行ったりこっち行ったりしているのを見かけなんだろうと思っていたら笄が察したのか

「ありゃ北井グループの人じゃねーか」

「北井グループ？…何で分かるんですか？」

僕が笄に聞くと

「アレ見ろあの人の胸」

「？」

見ると男の胸には『KITAI』のバッチが付いていた

「あ、成る程」

とまあそこは納得したのだが一つ疑問が出来た

「じゃあ何であんなそわそわしてるんでしょう？お仕事でもお店とかに入ったりする筈でしょう普通」

「知らねーよそんなこと ほら行くぞ」

僕らは、何も無かった様に歩き出した

普通だった日常（後書き）

次回はキャラ紹介（吉信と笄）です

キャラ紹介 赤松吉信、澄田笄（前書き）

タイトルにあるようにキャラ紹介です
話進まなくてすいません

キャラ紹介 赤松吉信、澄田筭

赤松吉信

(15)

身長は小さめ

誕生日 3月1日

学力は学年トップ

運動神経は中の下の下

母親は死去、父親は単身赴任でサウジアラビア（飛ばされた!?!）

兄弟もいないので一人暮らし

趣味は勉強と読者（マンガ、ラノベ込み）

敬語で話す癖がある長所 礼儀正しい、優しい

短所 作者が考え付くまでなし

澄田筭

(15)

誕生日 6月7日

身長は銀●の銀●ん位

学力は学年でワースト10位以内

運動神経は上の上

吉信の親友

5歳年下の妹がいる

趣味はゲーム、マンガ、パソコン動画

長所 いいやつ

短所 がつつき系、負けキャラポジション

キャラ紹介 赤松吉信、澄田笄（後書き）

展開のリクエストなどがありましたら感想の所を書いて下さい

出会った（前書き）

短いです

クソです

まとまりがありません

出会った

筈と別れた僕は、特に寄り道する事も無く我が家に帰った。

ウチは、一般の家庭とは少し違って母親が病死、父親がサウジアラビアに単身赴任している、作者が怠けて前回の登場人物紹介でも出たが僕は一人暮らしだ。家に帰ると孤独が待っている……なんて事は無く、案外そうでも無かった。だって楽しいもん。今日もまた、何をするかな 筈の言う通りたまにはゲームもするかな。僕はそんなことを考えながら家の鍵を開けようとしたときだった

「やっとお帰りなされたんですね！！ご主人様！！」

一人の少女が庭の方（庭と言っても小さくク●●んの野●●家の庭の3分の1位、え、分らない？じゃスク●●●イズの●●くんの人間としての器の大きさの40倍位の大きさ）から現れた。

「え？……………あ、あのう……………どちら様ですか？」

僕の問いに少女はこう言った

「あなた様の犬です！！！！ご主人様！！」

「！？」

こうして僕と平和な人生は目の前の少女によってどんどん脅かされていくのだった。

出会った(後書き)

最近『ひぐらしのなく頃に』にハマりまくってます！

そんなことより

誰か読んでますか？コレ！？もうなんでもいいからなんか書いて下さい、悪口でも、グチでも構いません
でも出来るだけやめて下さい

初対面

「……………それで貴女は一体誰なんですか？」

とりあえず外に居るのも難だったので僕は少女（不審者？）を家に入れてお茶（玄米茶）を入れながら彼女に問う

「貴方の犬です！！！！ご主人様！！！」

少女は元気に言う

「あ…………いや…それさつきも聞きました…………え〜と…………とりあえず名前だけでも教えてくれませんか？」

「北井真美、今日からご主人様の犬を勤めさせていただきます」

……………？……………？……………？……………

しばらくお待ちください

「はい？」

「どうかなさいましたか？ご主人様？」

真美と名乗った少女は少し戸惑った様子で僕のもとに来る

「え？犬ってアレですか？ダルメシアンとか、プードルとか、シベリアンハスキーとかの犬ですか？」

「んー確かに『ワン！！』とは鳴きますが…………なんとなく違いますかね〜」

例えば、

キユーティ●●●偵●幡の鉄人こと●●さんから見た因●洋とか、
ピカ●●●畜のキュ●●から見た●ハネとか、

「そういう感じの犬です」

伏せ字だらけ、マニアックすぎる説明だったが僕には理解出来た

「あ、なーんだ、そっちの方の犬かあー、僕ったらウツカリ」

ア
ハ
ハ
ハ
ハ
ハ
ハ
ハ
└

「アハハハハハハハ」

「アハハハハハハハハハハハハハハハ」
「ってて

「だ・か・ら！！！！なんでそんな人が僕の所来るんですか！？僕はノーマルですよ！仮に僕がソツチ系の人でもなんで見ず知らずの人ん家にくるんですか！？そういうのはソレ系のお店行つて下さい！！！！！！大体、犬って自分から人権放棄していいものなんですか！！！！！！ダメですよ！そんなの！！！！！！」

僕は力の限り彼女に言っ
てやった

するとどうだろう、彼女の顔がどんどん赤くなっていった。

.....

そして彼女は言った

「あ、あ、あはあゝゝもつと叱つて下さい！……！いやお仕置き、もつと言うなら苛めて下さい！……！」

なんという事だ……喜んでいる……これが噂に聞くマゾヒストと
いうものなのか……

初めて本物見た……

「……あのですね」

ホントなんで僕なんですか？100歩譲って僕がソツチ系の人間だったとしても、僕等は初対面ですよ

僕はマンガ、ラノベのお約束を守るほど空気読みませんよ」

僕はキツパリと言つてやつた

なんで僕は身元も分からない不審者を家に上げているのだろう、ま

ずそこからしておかしかった。

とりあえず僕は真美と名乗った少女を追い出す事にした

「とりあえず出てって下さい、迷惑です」

「嫌です！……！」

ご主人様、どうか私を傍に置いて下さい！……！お願いします……！

「！！」彼女は深々と頭を下げてきた。ぐっ 断りずらい……

だかここはやはりキツパリと断らなければ

「だからだm

ズドーン

突然

客室に風穴が空いた……………

オッサン乱入!! (前書き)

赤松家に一体何が……………

オッサン乱入！！

客室に風穴が空いた

「.....え.....ええ」

え、何？ありえないよね！？何の前触れも無しに普通、部屋が吹っ飛んだりする！？ありえないありえない、曾●くんが芭●さんに善意に満ちた笑顔を向ける程ありえない、グレネード弾を体で受け止める富●さんの肉体レベルにありえない、あれ？何か鉄で出来たデカイ球が見える…鉄球打ち込まれたの！！！！？

そんなことを考えてたら風穴から一人の老紳士が現れた

「え、な、何者？」

老紳士が無言で近付いて来る。こ……来ないで……

もう人生オワタと思った時老紳士が頭をペコリと下げて挨拶する

「初めまして私真美お嬢様の執事をさせていただきますわたくし」

マルコ・XV・桜井と申します。以後お見知り置きを」

XV……かあ……カッ
コイイなあ……職業
なんだろう……執事？
ハヤ

●とか時●とかポー●とかがやってるアレかあハ●テはともかくイ
メージぴったりだなあ……………????

「お、お嬢様 ああああ！！？ この人が！？」

そうである

確かに家に風穴が空いた事も執事さんの名前がちよつとカッコイイ事も大切だがまず、このプライドもへったくれもない少女がどつかのお嬢様だということに驚きである

「はい、私これでもあの北井グループの女社長、北井稀華の一人娘ですよ、褒めて下さい……ご主人様……」

「嘘おおおおお!!! あの特大大企業の北井グループの一人娘ええええ!!!」

「本当でございます 真美お嬢様はでジマで社長の娘でございます 執事が『でジマ』とか言い始めた……ていうか死語だと思っただけどなあ

「ってかさつきも同じ様な事聞きましたけど、そのお嬢様がなんでこんな所居るんですか! 万が一、Sを求めて来たとしても、僕はノーマルですからね! ていうかなんで僕の所に来るんですか!? あらゆる所がおかしいでしょう!!!!」

僕がそう言うともマルコさんがゴホンと咳払いをする

「それは私が説明しましょう。赤松吉信様……貴方自身は自覚は無いかもしれませんが貴方は今世紀最高レベルのS体質なのです」

「……………は?」

「そうなんです、私は何年も掛けて様々なデータを照らし合わせて、ついに……ついにご主人様を見つけたんです!!!!!!」

「……………いや……いやいやいや何? やっぱり全ておかしいですよ!! なんですか? 様々なデータって!?!」

「字画、血液型、学力、運動神経、信頼出来る情報屋からの情報（人間関係、好きな食べ物、嫌いな食べ物、趣味、その他もろもろ）等々です」

……………プ……………プライバシーもへったくれもね……………

「そのデータによると貴方こそが最高のドSなのです!」

「ないないないないないない
本当にありえない

僕、趣味って言っても勉強とマンガを含む読書だけですし
運動神経もほぼ0に等しいですよ!」

「データだと運動神経は中の下の下、良くはありませんがそこまで
いうほどの悪さですかねえ?」

「Sなのに決して付け上がらない……………それもまた……素敵」

「誰がこの二人をどうかしてくださあーーーーーい!!!! 僕には手に負えませーん!!!!」

「とにかく!!!! 私にはご主人様が必要なんです!!!! お側に置いて下さい!!!!」

イライライライライライライライライライライ「い・い・加・減・に……」

諦めろよ!!!! 嫌って言ってんだろ!!!! アホ共おとおおお!!!!

ズドワツ

「ああああああああ」

僕は二人を家から蹴り出した

僕は気付いた

僕はキレると敬語じゃ無くなる……こりゃ本当にS体質なのかなあ僕

一方蹴り出された二人

「やはり無理でしたねえ」

「ええそうね、でも最後の蹴りと罵倒、未だかつて無い程に興奮したわ……私、絶対にご主人様の犬になってやる……私は諦めないわよ」

少女はリベンジを固く誓ったのだった

オッサン乱入!! (後書き)

どうも

部屋は真っ暗じゃないと眠れない

闇コロです

いやー勢いで書いたこの小説ももう結構な話数になりましたねえ（
それでも無いぞ）

そこで闇コロからのお願いです

誰か感想を下さい!!!!!!

いやもうなんでもいいんでホントお願いします

ってそんなこと書く時点でもう末期ですかね……………

キャラ紹介北井真美、マルコ・XV・桜井（前書き）

は
い

キャラ紹介です

キャラ紹介北井真美、マルコ・XV・桜井

北井真美

(15)

身長は平均値

誕生日 2月9日

学力は天才レベル

運動神経は「先生、体力には自信あるんだ」とか言ってるインドア教科の先生レベル

世界にはばたく北井グループの一人娘

超DM

吉信の事をご主人様と呼ぶ

髪型はロングで一ヶ所に束ねている

短所 DM

マルコ・XV・桜井

(51)

身長はじいさんにしては高め

誕生日 9月28日

学力は京大の教授位

運動神経はや●チャ位なら頑張れば勝てる位
執事なので万能

真美の母親の代も執事をしていた

短所 やることが過激

キャラ紹介北井真美、マルコ・XV・桜井（後書き）

さつき

ニコニコRPGのシューティングでの敗北数が80を超え涙目の闇
コロです

あ~~~~~

アレ難しいよ~

早くハルヒ、こなた、言葉通り仲間にした~~~~~い

まあそれはそうと

今回も話進まないですいません
キャラ紹介に逃げました

>m (m<

これからどうやって話転がすか……

リクエストか何かあったら

感想をお願いします

では

DM再び

痔梨理梨理梨理梨理梨理梨理梨理梨理梨理って違う!!!!!!

ジリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリ

と目覚まし時計の音が鳴る

昨日あんな事があったのでよく眠れなかった……………

僕は目覚ましを止め

むくりと起きる

「……………そういえば昨日吹っ飛んだ客室……………どうしよう」

相手の素性も分かったんだし、ここは訴えるのが普通だろう……………でも……………北井さんとマルコさんには悪いけど

もうあの二人とは関わりたくない

筋金入りのDM

豪快すぎる老紳士

余り近づきたくないのが本音だった

だってそうでしょう

前々回の話を見て貰えば判るように

あんな危険人物二人組と一緒にいたいと思いますか？

思う方は言っして下さい

作者からそこそこなお店（一応中二って事をお忘れなく）と僕から

いい脳外科紹介します

そんなこと考えながらリビングへ行く

そして目を見開いた

この家は構造上リビングから客室が見えるのだが

……………客室が……………直ってる……………

.....

夢……だったのかなあ……そうだよね!! ありえないよね!! あそこ
まで馬鹿げた夢を見る僕ってドリーマー!!

「うん……やっぱり平和が一番だ」

僕は急いで朝食を食べ学校の準備をする

眠りが浅かったのですぐに起きた今朝はゆっくりのんびり学校へ
行こう

そんな僕の細やかな願いは玄関から出た瞬間に絶たれた

「おはようございます! ご主人様!!」

何かいつの間にか作られてる犬小屋に昨夜の少女、北井真美さんが
繋がれていた

「……………お……おはようございま
す……………っていうか何故ここに?」

読者の方には申し訳ないが本当は夢だったとか、そんな夢落ちを心

から願っていた僕は3000のダメージを食らった

「私はご主人様の犬ですよ、だからご主人様のお近くに」

「いや、だから諦めて下さいって昨晚も言ったでしょう」

それに僕の家に勝手に犬小屋作らないで下さい!!!!!!」

「お詫びにに客室を直しましたが、それでも駄目と言うなら
(くるくるくる)

ワン!!」

「あーもう僕には理解できません、どうしてそんなに僕につきま
とうんですか？」

仮に僕が最高レベルのドSだとしても

どんだけ強い執念ですか？

もうホントいい加減にして下さい」

「(ゾクゾクウ)もっと罵って下さい」

「罵ってませんよ!! お願いですからどっか行ってください、僕は
これから学校がありますので失礼します」

僕はそう言ってツカツカと学校に向かう

諦めて……………もらえると……………いいな……………

転校生って展開なんかありがちだよね（前書き）

最近どんどん投稿が遅くなっていく……………

転校生って展開なんかありがちだよ

「って事があったんですよ」

朝のホームルーム前の休み時間、僕は筈に昨日、そして今朝の話をした

「ほう」

新しいラノベの話？

それとも何かの物理学？」

「いえ、実話ですけど……」

まあ予想通りの反応だった

まずありえない出来事だし……

「ったく……お前疲れてんだよ

そんな羨ましい状況、ないないない♪」

「え、筈って……」

もしや、あっち系……

「って違ーよ、そういう意味じゃねーよ！！そんな目すんなよ！！」

「じゃ何なんですか？」

「……あのな、お前、インドア過ぎて遂に男の本能も忘れたのかWAWAWAかよったく……」

WAWAWAって読者の何割が解るのかなあ

「よーするに、変態かもしれないが美人で自分の事を慕ってくれて、おまけに金持ちって最高じゃねーか……まあ現実だったらな……」

「つまり筈は、妹系が好みって事ですか？」

「……」

「……」

「……」

「……あれ？……凶星？」

「そうだよ！！悪いかよ！！いいじゃん妹系！！上目遣いとか萌えんじゃん！！わかんねーのか！！その魅力が！！」

筭はとうとう開き直った……

「まあ解らなくはないんですけど……ていうかそこまでの妹萌え……もしかして弥美ちゃんも」

弥美ちゃんというのは筭の五つ年下の妹でまあそこそこの顔立ちの少女だ

僕もよく筭の家に行くから良く知っている

「いや、弥美は大切な妹だ、そんな感情は抱かない」

んー言ってる事が矛盾してる気がする

「えーつまり筭は、妹萌えだけど実の妹の弥美ちゃんに恋愛感情は抱いていないって事ですか？」

「勿論だ、願わくば、血の繋がらない妹が欲しい」

あーもう筭に妹系だとかの話は止めよう

その時ガララと引き戸が開き僕らの担任の畑鏡蘭先生が入ってきた

ハタカガミラン

「おいクソツタレ共ー静かにしろー」

この教師、生徒に向かってクソツタレと言い出した………

仮にも女性でしょ反面教師

まあそんなこと思いながらも号令をとっとと済ませホームルームが始まる

「えー突然だが、今日は転校生が来ている、それも金持ちだぞー男子は逆玉チャンスだぞー」

いやアンタ本当教師？

「んじゃ入って来い」

畑鏡先生が言うと一人の少女が入って来た

「北井真美です」

よろしくお願いします」

夢であってくれ……………

転校生って展開なんかありがちだよね（後書き）

部活（ハンドボール部）

やだ

S T S

だかなんだか知らないけど勘弁して欲しい

関係ない愚痴でしたねすいません

僕S（なんか略してみた）の連絡は不定期連絡で極めて不安定ですが、一応僕の小説の中で一番人気ですので最低でもあと数ヵ月は続けて行こうと思います（応援よろしくお願いします）

感想等ありましたら

どしどしお願いします

いやホント

裏金？（前書き）

タイトルほどのシリアス展開じゃありません

く……………空気が……………

………空気が重くなった……………

そりゃそうだよね

大企業の娘さんが

クラス全員の前でとんでもない趣味暴露したらこんな空気にもなる
よね……………そんな空気も読まずに畑鏡先生は笑いながら

「ハッハハハ！！」

若いっていいねえ

先生もよくやるよ

アハハハハハハ！！」

なんか言ってる

教師失格じゃないか？アレ？

「はい、質問です」

そんな空気を打破したのは僕の親友である筈こと澄田筈だった

「北井さんの言う

ご主人様ってもしかして吉信の事かなあ？」

筈にあの話、しなければよかった……

「はい！正解です

あのご主人様の蹴り……今思い出しても興奮します」

余計なこと言うな……

僕がそう思ったのもつかの間、クラス中の視線が僕に集中した

あ、青春オワタ

「吉信……お前マジで……」

笄がいや／＼な目線を僕に向けて聞いてきた

「……………助けて下さい……………」

そんな僕の敗北宣言に筈は以外な言葉を返した

「ハッハハ！」

羨ましすぎる！

こんなラノベ的展開

十回位、人生やつてもそうは起きないぜ」

マンガ、ゲーム脳にはついていけない……………

「おいしい」

盛り上がつてゐる所悪いが

実はもう一人転校生が来ている

い
い
ぞ
」

畑鏡先生が言うところの転校生が教室に入ってきた

男の人だ、

いやに老け顔だなあ

見た感じ高校生には見えない

いや、なんかどっかで会った事があるような……………

「マルコ・XV・桜井君だ」

マア アア アア アア アア アア アア アア ジイ イイ イイ イイ イイ イイ
 イイ で ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ !!!!

いやいやいや

ありえない、ありえない人違いだよ

あんな危険な老紳士が来る訳が無い

そんな僕に残酷な一言が発せられた

「はじめまして

マルコ・XV・桜井です

只今、真美お嬢様の執事をしております
どうぞよろしく願います」

本人だあああああ

やり過ぎだろ

あの人

「よし、んじゃ仲良くしてやってくれ

以上だ、ほい号令」

きりー きよつけー れー

朝のホームルーム終了

いや

ツツコミ無しかよ!!

休み時間、僕の元に筈、北井さん、マルコさんの三人が集まった

「……………なんで学校にまで来るんですか？」

ほとんどストーカーですよ、コレ」

「大丈夫です

警察なんてちよっとお金を出せばすぐ味方になります」

悲しき日本の現実……………（いや警察全てを否定してる訳じゃ
無いですよ

というかこれはこの小説の世界の話ですよ

分かっていると思いますけど

b y 闇コロ)

「勘弁して下さい……………」

何度でも言います

僕はノーマルです」

「おいおい吉信、とりあえず

主人、飼い犬はおいといてクラスメートとして仲良くしてやれ」

「そうでございます

仲良くやりましょう」

「って年齢ごまかしてくせに何を言う!!!!!!」

あ、また言葉遣いが悪くなった……………」

裏金？（後書き）

えくくく

中学三年生になりました

学級委員になりました

筈「関係無い事書くなぁアンタ」

うっさい！

いいじゃん別に

筈「連載小説ほったらかして短編小説書いてたんだから
こっち位ちゃんとやれば」

いやでもほとんど投稿までの時間変わって無いからさぁ
筈「と、言うわけで言い訳ばかりする作者でしたとさ」
いやしょうがな（以下略）

いつもと違う昼食（前書き）

最近

時間がなくて

更新が遅くなってます

すみません

次話も何時になることやら……………

いつもと違う昼食

昼休み

いちもは僕と筈だけで昼食を食べているのだが
今日の昼食はとても賑やかだ

何故だって？

今日は僕と筈に加えてデンジャラス転校生こと北井さんとマルコさん
とで昼食を食べているからだ

「ご主人様！！

あーんして下さい！」

北井さんはそう言って箸でアワビをつまみ僕の前に出す

「あのー

このアワビになんとかなく悪意を感じるんですけど」

「悪意ではありません！！！！」

好意です！！！！」

「お断りだあああああ！！！！」

僕は集まっていた机をひっくり返す

ドンガラガッシャーーン（↑古い）

辺りに弁当が散らばった

筈だけはギリギリで気づき自分の弁当を避難させた
まったくなんでも出来る人だ

「そういうアブナイ事言うのマジで止めて下さいよ

一応この小説、R-15にはなってますけど

シャレにならないですからね!!今の発言!!」

僕はツツコミながら北井さんを見ると

「(ポツ)」

赤くなったああああああああ

ドMってめんどくさい

「吉信

さすがにやり過ぎだろ

一応北井さんは好意でお前にアワビ差し出したのに怒鳴って机返し
はあんまりだ

そして何か俺、ツツコミキャラっていうか常識キャラになってね？」

「いや知りませんよ……」

と言ったものの

筈の言った通りあんまりだったかもしれない

「……………すみませんでした

折角の好意を……」

「(ガーーーーーン)」

アレ?何?この謝っても謝らなくても結局嫌な気持ちになるという
シナリオ……まあなんとなく予想出来たけど……………

「……………えーっと……………」

どう話を転がすものか……………

この空気、地味に気分悪い

そこに筈がそっと僕に耳打ちする

「こういう時はとりあえずお詫びとして学校案内してやれ」

マンガ脳の筈の事だきつとラブコメ的な意味で言ってるんだろう……

でもまあ

ラブコメ的展開は

まずありえないしそれくらいいしないと北井さんも不便かなあ

ていうかこの空気を打破するには
それしかない

「あ…あの…これから学校案内しましょうか？
北井さん、マルコさん」

「ごっご主人様自ら!？」

ありがとうございます

是非イかせて下さい」

「字が違う!!」

『行く』ですよ」

前回からますますヤバくなってないか？この人……………

「それじゃあ行きましょう北井さん、マルコさん」

ポコーン（↑またしても古い）

「はだっ!!」

何するんですか!？筈」

「バカか……折角北井さんとの二人きりのチャンスを……（小言）」

「なにバカな事言ってるんですか」

多分筈には何を言っても無駄なんだろう

そこに今まで空気と化しかけていたマルコさんがすくりと立ち上がる

「申し訳ありませんが

私には先約がありまして」

と言ってマルコさんは教室のドアの方でソワソワと恥ずかしそうに
マルコさんの事を見ている女子7、8人の方に親指をやる

いつもと違う昼食（後書き）

未来日記は面白い

薬、ダメ！絶対！

まあ

老いぼれのモテ加減はいいとして

僕は北井さんに校舎を案内する事になった

筈はというと「行ってこい行ってこい

俺あ邪魔だろ」とのこと

「じゃ行きましょう、ご主人様」

そう言う北井さんの首には首輪が付いていてその首輪の紐の先を僕に差し出している

「はい、ツツコミませんよう

とつとと行きましょう、首輪は外してくださいよ」

「ポッ（ある意味放置プレイ）」

また赤くなってる

今度は何故だ？

それはさておき僕は北井さんに首輪を外させてとりあえずここから近い科学室に行くことにした

「ここが科学室です」

とりあえずありのまま……ていうか当たり前の説明をする

「あの……ここにはいろんな薬があるんですよね？」

「え……まあ常識の範囲内では……」

「いろんな道具も？」

「必要最低限は……」

「（ニヤッ）」

「？」

何やら北井さんが怪しい笑みを見せたがそこは無視して行きましょう、スルーライフです

次に来たのは美術室、ここでは北井さんは何もボケず次に進む

で、お次は保険室、絶対来るな……………

「あの……ここにも色々な薬があるんですよね？」

「だからなんでそんないやらしい……………って、え!？あ、葉
? ありますよ色々」

「ご主人様、今、私との催しを想像しましたね？」

チクシヨ
| | | | | | | | | | | |
! ! ! ! ! ! ! ! ! !

そっち系の質問が来るとばかり

墓穴を掘ったああああああああああああああああああああ

ていうか何故北井さんは薬の事ばかり聞いて来るのだろうか？

謎だ

薬、ダメ！絶対！（後書き）

話が前に進まない……………

それに

多分

この小説

前までの勢いではもう投稿出来ないと思われま

す
それでは

会社の事情（前書き）

短い………

会社の事情

えゝ

さっきのは忘れて下さい

悪い夢です

その後

僕と北井さんは

音楽室、家庭科室、コンピュータールーム、体育館と回った
体育館に来たとき北井さんが異常に息を荒立ててはいたものの、そ
んなこといちいちつっこんでたら身が持ちません

んで

次は食堂でも案内しようと食堂に向かった時、僕は相当前……………

……………もとい昨日の事を思い出した

「あの、僕気になってたんですけど……………」

「私の事をですか？」

「違います、人識過剰ですね

……………話を戻します

昨日、僕と筈が下校中、北井さんの会社の人と思われる人が妙にそ
わそわしてたんですが

何か心当たりありますか？

もしかして北井さんの暴走を止めに来た人とかですか？

だったらまあ助かりますけど……………」

はゝゝい

読者の皆さん

もうとつくに忘れてますよね

作者がぜんぜん執筆しなかったので

書くのスッゴク遅れ作者すら忘れかけてた北井グループの人達、最初の方で出てますよ〜

「嗚呼……………やっぱり……………」

いえ、私のこのプロジェクトは社員全員が承諾したので

そんなことは無い筈です」

一体、北井グループはどうなっているのか……………」

「では、やっぱりって？」

「いや、そりゃ一大企業の社長の一人娘が護衛も執事だけなのに民家に泊まるなんてことスパイに知れたら命位狙われて当然です」

「いや何こんなヤバイ事さらっと言ってるんですか！命狙われてるんでしょ！僕になんかストーキングしてないで家に帰って下さいよ！」

僕がそう言っていると北井さんは

「ダメです

母はそんな困難に耐えながら私を産んだんですから」

あ、親の代からこんな事してんだ……

どんな家庭だ！！？

「それにもしもの事があつたらご主人様が助けてくれますし………」

「そんなハヤ●のごとくじゃあるまいしそんな展開望まないで下さいよ」

「え!?! ないんですか? 同じ敬語なのに?」

「ありませんよ! ってか作者もよく十巻くらいしかまだ持ってないのにネタにしたなあ」

この時はまだ

本当にそんな展開になるなんて

思いもしなかった……………」

「ナレーションみたいに言うの止めて下さい」

「え」

「『え』」

「じゃありません」

会社の事情（後書き）

だれか感想書いて〜

筭「こんな短くてつまらない小説に書く人なんていないだろ」

い〜〜〜〜う〜〜〜な〜〜〜よ〜〜

筭「中三にもなって情けないな……」

……………

んで結局（前書き）

僕にしては長め

んで結局

キーン

コーン

カーン

コーン

キーン

コーン

カーン

コーン

キーン

コーン

カーン

コーン

キーン

コーン

カーン

コーン

長えーよチャイム！

ていうか完全に行数稼ぎでしょ！コレ！！

ま、それはそうと放課後、え？前回の終わり方が微妙？そんなこと

言ったって作者が「学校案内引っ張りすぎじゃね？」なんて言い出して……………全くだこまでもいい加減な作者だ……………んで放課後

「吉信、帰ろうぜ」

「はい今行きます」

いつも通り僕は筈と帰る事に、北井さん？彼女は無視です、なんかくっついて来てるけど

「筈、一昨日借りたキューテ●●ル探偵●幡

読み終わったんで返せますけど、今日家に来ますか？」

「いや、今日はちょっと●の穴行く計画があるんだ、明日にでも返してくれ」

え！？もう4時ですよとは言うまい……………なぜなら筈は娯楽の為ならどこまでも無茶する男なのだから。

帰路

筈と別れた後、なぜか北井さんが付いてくる、今から始まった訳でもないが……………

ひたひたひたひた

「ひぐ●しかよ！！」

僕は思わず振り向きツツコンだ

「はあああ……………やっと私を見てくれた」

なんか某ヤンデレCDみたいな事言ってるなあ

「ずっと放置プレイなんて興奮するじゃないですか」

変態……………

「ていうか何故付いて来るんですか？

ストーカーですよ！」

そういうと北井さんはニヤリと笑い

「わかりました、昨日みたいな無茶はもうしません

今日はただご主人様の家に行きたいと思い」

……………なんだ？やけに聞き覚えがいいぞ、何にしても北井さん、よくニヤリと笑うなあ

「……………はあ、わかりました、ただのお客として来る分にはいいでしょう」
「こういう所がつくづくあまいな僕

そんなこんなで自宅

「とりあえずお茶を」

テーブルと椅子があるのに床に座っている北井さんに僕はお茶を渡す

「ありがとうございます」

北井さんはそう言うとお茶を鼻から飲み始める

はい、意味不明

北井さんは痛そうだ、でも嬉しそうだ無視しよう

「大丈夫ですよ、ご主人様！鼻と喉は繋がってますからこれでもちやんと喉を潤せます」

聞いてねえー

ダメだこの人

マゾ以前に意味が分からない

このままじゃ この人、また僕の家で何かやらかし兼ねない

「……………えーと

それで、今日は何の用ですか？

用が無いなら早く帰って下さい」

「あ、ちゃんとありますよ、用事」

「また僕に主人になれとかそんなんでしょ、嫌ですよ、全く」

「いえ、それもそうですが、今日は違います」

あ、やっぱりまだ諦めて無かったか……………

僕はやれやれとお茶を啜る

「実は今日から私、ご主人様の家に泊まる事になったんです」

「ブ……………」

……………いい歳して盛大に吹いちゃたよ

「……………話が飛躍し過ぎです
却下ですよ、却下」

「そうは言っても

もうご主人様の御父様からはもう許可が下りてる筈ですが」

「は？」

あのオヤジが……………ですか？」

あのオヤジならやりかねない

その時、電話が鳴った

ま……………まさか……………

僕はとりあえず電話に出る

「……………もしもし、赤松ですけど」

『おお、吉信か！

オレ、オレ！愛すべき父さんだよ』

嫌な予感的中

「誰が愛すべき父さんですか？

このクソオヤジ」

『おいおい、クソオヤジってお前……………』

「それで、どうしたんですか？よくサウジアラビアから掛かりましたねこの電話、」

『あ……………それがさ……………父さん、仕事中、事故にあつてさ……………全身の骨が

バキバキらしいのね、
父さん、もうダメかな〜って思ってたら、マルコっていうイカした
老紳士に助けてられてさ〜
今すごい病院にいんだよ
んで、オレが
なんか恩返しさせてくれ〜
ったらマルコさんが
では、私が執事をしている、お嬢様を貴方の息子さんと同棲させて
下さい
なんて言ってさ〜
父さん
いいよ〜
って言っといたから』

僕が一番に考えた事は

マルコさんスゲー

だった

「では同棲生活は承認って事で」

誰か助けて下さい

んで結局（後書き）

はい

これでとりあえず

一段落つと

3ヶ月かかりましたねゝ

んでこれからの話について色々注意があります

その壺

色々、人外なもの（●ルヒが喜びそうなもの）が出る予定です

その式

やっぱり更新遅い

その参

色んな影響受けまくり

そんな感じですよ

では

キャラ紹介

畑鏡蘭、赤松忍（前書き）

キャラ紹介

キャラ紹介 畑鏡蘭、赤松忍

畑鏡蘭

(25)

身長 高め

誕生日 7月4日

学力は生徒以下

運動神経は凄くいい、ワッ●ー以上

反面教師、吉信達の担任、ダメ人間、作者は『ハヤ●のごと●』の桂先生、『●き☆す●』の黒井先生、『●八先●』の銀八先生、『●生●会役●共』の横島先生、『バ●ブー●ード』のコジロー先生のようなダメ教師をイメージして作ったキャラ

短所 書ききれない

赤松忍

(40)

身長 高い

誕生日 2月1日

学力は普通、ごく普通

運動神経は天下一武●会の予選、準決勝オチ位

吉信からいつも相当酷い事言われヘコむがすぐ立ち直る
今はサウジアラビアのでかい病院に入院中

テキトー

なんか考え方が若い

キャラ紹介 畑鏡蘭、赤松忍（後書き）

ダメ人間特集でした

現実世界で色々あって全然本編書けなかったらいつの間にか小説の世界で1週

遅くなってすみませんでした。

今回はホント何て事の無い話です

現実世界で色々あって全然本編書けないでいたらいつの間にか小説の世界で1週

まあタイトルの通りなんやかんやで北井さんが居候になり1週間が過ぎた：

ホント大変だった、

筈には「うらやましいぞコノヤロー」といわれのない非難を浴び

北井さんは毎日毎日自分の人権を捨てきった要求をしてくるし：

作者は親にとある事情で怒られてマンガ、ゲーム、小説、その他もろもろを捨てられかけたし（執行猶予中）

とにかく、散々だった

え？僕は今何してるって？

僕は今、珍しく北井さんが静かなので（嫌な予感アリ）因数分解の復習をしています

ヴヴヴヴヴ

何だ、この音？

謎の音はどんどん近ずいてくる

「……………嫌な予感」

ガチャ

「失礼します!ご主人様!」
嫌な予感の中…北井さんが入って来た

何か局部に振動する物を入れて…

「ハイ、ダウトオオオオオオ!!!!何、射れてんですか!? いや
言わないで下さい……………危なっかしいんで」

「そうですか(しゅん)」

何ガツカリしてんだこの恥女

「……………それで、何かご用ですか?北井さん」

「ああ、ハイ!それが今日、金物屋さんがセールなんです、ご一緒に
ショッピングにでも」

「金物屋?……………因みにその金物屋で北井さんは何を買うつ
もりなんですか?」

「それは勿論バ●ブとか●ターとか」

「はいっストップ!そんな危ない金物屋絶対行きませんかね!」

「……………じゃあ、ご一緒にドラッグストアなんかを」

「お断りです!」

「……………では洋服屋に生きましょう、最近のファッションに
乗り遅れてはいけませんよ」

「なるほど…確かに流行にはついてかないと…ですね」

「ですよね!!では行きましょう!!」

「だが断る!!」

「(ガーンン)」

どうせ、あっち系のファッションでしょう、ついていきたくも無い

「…………お預けもまた…(小言)」

「聞こえてますよ」

僕はとりあえず北井さんを部屋から追い出し、勉強に集中する事に…

ちゃんちゃかちゃかちゃか♪ちゃんちゃん♪ちゃんちゃかちゃか
ちゃか♪ちゃんちゃん♪

メールだ……………

因みに今の着メロは知る人ぞ知る有名番組の音楽とは全く関係ない
…伝統的な娯楽番組なんて関係ありませんよ

送り主は筈だった、内容は←

件名 今暇か？

本文

俺これから渋谷辺りに行こうと思うんだが、暇だったら一緒に
どうだ？

ナンパしようぜ！ナンパ！

（＾ 3 ＾）来れたら30分後位に駅集合な☆

あの万年●口め……………

箕は顔は良いのでナンパ自体の成功率は高いがガッツキ系なので大
体すぐに別れる事になる

そんなんだったら始めからナンパなんてやらなきゃいいのに…別れ
る度に慰める僕の身にもなれ……

僕は谷ぐ……………箕の誘いのメールは無視する事にした
当然の処置だ

チャーチャ♪チャツチャラ♪チャーチャーチャチャチャーチャ
ーチャチャーチャチャ♪チャララチャーチャーチャーチャーチャ
ヤーチャラ♪

着メロだ……………電話の……………ていうか作者あ

いくらド●ゴン●ールZ主題歌イメージしても字数考えたらどうだ
もうメチャクチャじゃないか……

ま、それはいいとして

ピッ

「もしもし、誰ですか？」

『赤松!!』

助けてくれー!!

ブッ

ツー ツー

切れた………

誰？

現実世界で色々あって全然本編書けないでいたらいつの間にか小説の世界で1週

あー書くこと無え

筈「だったら後書き設けるなよ」

土とか食べちゃおっかな

筈「勝手にしろ!」

.....ツツコメよ

クリオネって怖いよね（前書き）

一度全部書いたのにボタン間違っ
て全消ししてもうた（涙）

クリオネって怖いよね

ブボッ

と●ツツリー●ばりに鼻血を吹き出す筈、手元にはアレ系の小説、

「……………フツ

俺とした事が、つい興奮しちまったZE」

なにが『ZE』だ…

「因みに、興奮して鼻血だすって

ありえない事なんですよ」

「は？」

「いや、だから興奮して鼻血出すってのは科学的根拠無いんですよ
筈、鼻でもほじりました？」

「ナイスガイなこの俺が鼻なんかほじるか！」

ナイスガイは自分の事ナイスガイなんて言わないと思うが…

「鼻ほじって血が出たのでなければ、

高血圧

動脈硬化

貧血

白血病

等の可能性が……

（空想科学読本6より）

「辞めてーーーーー！んなリアルに怖い事言うの辞めてーーーーー

「！！！」

と言って笄はどこかへ行ってしまった

あれ？深刻なのは中高年からって言ったっけ？

ま、いっか

「流石ご主人様、いいドSっぷりですね」

北井さん乱入

「多分、笄さんはチョコレートでも食べてチラミンによるアレルギー反応でも起こしたんでしょう」

「でしょうね」

ドドドドドッ

ん？足音、笄の逆襲か！？

ガラッ

「赤松ううううう！！！」

「「！！！」」

教室に片腕吊ってる人が入って来た

「オメー！助ける言ったらすぐ助けるよ！！！！！！危うく死にかけたんだぞ！！！！！！」

「あーあの電話、先輩からだったんですか」
「気づけよ！」

「あの、ご主人様、この人は？」

「ああ、北井さんは知りませんでしたね、読者も取り残されるみたいですね、

えくくく

この人、サノイサム佐野勇先輩

先輩は僕と筈が中学生だった頃入ってた中学にしては珍しい漫画部の部長で、現在三年生で

先輩の事、一言でいうと……………ダメ兄貴って感じです」

「へ」

「うっせ」

ゴンッ

「だっ！」

拳骨……………

「で、どうしたんですか？その腕」

「刺された」

「は？」

刺された？ホワイ？先輩が？

「何故……」

「……………誰にも言うなよ」

「「はい」」

「……………え〜アレだ、赤松、俺に女友達いないの知ってんだろ」

「はい、悲しい程」

先輩は確かにイケメンとまではいかないが顔はそれほど悪くない、性格もダメメンズそのものだけど、ああ見えて意外と悪くはない
ガールフレンドの一人や二人、いてもおかしくない筈なのに何故か一人もそんな人がいない

「それじゃ深〜〜〜い訳があんだよ」

「「言い訳ですか？」」

まさか北井さんとハモるとは……

「……で？」

取り合えず、言い訳だけは聞きましょう」

「デメエな……」

ま、知っての通り、俺には妹がいる」

「そうなんですか？」

初耳だ

「んでその妹ってのがちよつと思いがアレでな

俺が女と喋っただけですぐに刃物を取り出す」

「なるほどヤンデレねえ」

うわっビックリした！ 筈がいつの間にか話に混ざってる

そして僕の後ろ首を力一杯掴んでる…

痛い、痛い痛い

「全く、何が『お兄ちゃん大好き』だ

大好きなら刺してくれんなよ」

「おおっと、先輩…：今全国8億4000万人のヤンデレ好きを敵にまわしましたね」

日本はそんなに人口爆発してない

「ヤンデレ言えば聞えはいいがアレマジで危ないぞ、昨日なんて図書館でたまたま会った知り合いの女子と喋っただけで腕を刺されたぞ」

ええー

「因みに先輩…：その妹さんってどんな人ツスカ？」

筈が聞くと先輩はケータイを開き見せてきた

「うわぁ待ち受け画面にアップ写真…：」

「それにしないと俺を食べるとか言い出した」
恐っ

因みに妹さんの名前は佐野みもり、ツインテールで泣きボクロの美少女、歳は中3らしい

「……………ストライク

おい、吉信、先輩を助けるぞ」
は？

「こんな妹系美少女先輩には勿体無い！」
ゴンッ

先輩の肘打ち…

要するに笄はみもりちゃん、自分に惚れさせようなんて思ってたのか
「……ま

言い方はムカつくがそうしてくれたら有り難い」

「でも何で僕まで」

僕が言っていると笄は僕の肩に手を置く

「吉信……いくらなんでも刃物使いちゃんのいるところに俺1人ってのはあんまりじゃないか」

「恐いんですが」

グサッ

北井さんの毒が笄を捉える

「まあ人は多い方がいい赤松、頼む」

ええ………嫌だ

「大丈夫です！ご主人様！もしもの時はこの雌豚めが身体を張って
護ります！」

何か行くムードになってるし……

「ま、その嬢ちゃんは赤松のお手付きだし、訳話せば大丈夫だろ」

ゞ（＾―＾） 〽おいおい

「よっしゃ！

そう決まったら

放課後、俺んち集合だ！」

「「おおー！ー！ー！」

ヤダ………

クリオネって怖いよね（後書き）

さ~~~~て

どうしよう……………

筈「ノープランかよ!!」

凄い人もいたもんだ…… (前書き)

死屍累々

凄い人もいたもんだ……

放課後

取り合えず校門前に僕、北井さん、先輩、筈の四人が集まった。
え？

マルコさん？

どうやらあのスーパー執事さんはお嬢様である北井さんを置いて箱根温泉にでも行ったらしい

というか、北井さんのにやけ具合から考えるに何らかの策略だと疑わざるおえない！

「……………で、一体どーするつもりだ？オマイ等？」

オマイ等言うな

「ていうか先輩、何で屋外で、しかも今、平然とポルノ小説読んでんですか？、どうゆう神経してんですか」

「フツ……何故今読むかだと？……………それは今、戦闘シーンに突入したからだ！」

駄目だこの人……………

「先輩、色々ヤバいんでソレしまつて下さい」

「なんだと……………！今、戦闘シーンなんだぞ」

「そうだ！空気読め！吉信！」

「ご主人様…それはちよつと……」

「うるせ……………！」

筈も北井さんも便乗すんな……………！！」

ズド……………

「ぐおおおおお！」

「ぎやああああ！」

「アハアアアン！」

取り合えず三人を吹っ飛ばした

「……………ま、取り合えず行くか…」

先輩が仕切り直しする

「お前等、安心しろ、暴走するとアレだが普段はまあ……性格いいから…アイツ」

いや、そのみもりちゃんに刺されて腕吊ってる人に言われても説得力が無い

10分後

「ここ、俺の家」

先輩が立ち止まって二階建て一軒家を指差す

「へえ」

学校から徒歩10分なんていい所住んでますね」

「まあな」

「あ！ここアレですね！

近くに柳田組ヤクザの事務所があって、誰も寄り付かないから安くなってる所です！」

流石、北井グループのご令嬢…情報量が半端ない

「ああ、アイツ等か」

と先輩はいかにもアレな人達を指差す

「な、何指差してんですか！？」

「あ？大丈夫だよ」

先輩の言った『大丈夫』は決して冗談とかじゃなかった

何と、先輩に気づいたヤクザ達は先輩に深々と頭を下げたのだ

「えゝ……先輩……ありや一体」

「ああ、先月辺り全員シメた、そしたらああだ」

ヤクザシメれて妹に負けんのかよ

凄い人もいたもんだ……

そんな事考えてると先輩は自宅の鍵を取り出し、玄関のドアを開ける

「うゝゝゝい

ただいまゝ」

先輩が言うより早くみもりちゃんとおぼしき少女が現れる

「お帰りなさいお兄ちゃん！」

「か……かぁいい」

「筈……」

最早、哀れみの目しか向けられない僕だった

「お兄ちゃん……その人達は？」

もしかしてまたお兄ちゃんを腐らせるようなゴミさん……かな？」

みもりちゃんは僕達を見て凄まじく冷たい声で言う

「い……いやいやいや……カワイイ後輩とその彼女、害は無いぞゝ

……多分」

多分って何！？

後が色々恐いから曖昧な事言わないで下さい！

「……そう

お兄ちゃんがそう言うなら

はじめまして、私、お兄ちゃんの妹で彼女の佐野みもりです」

「赤松吉信です」

「澄田筈です」

みもりちゃん、君カワイーね！」

と言いつつも筈は若干緊張している……無理もない、怖いもん

「わ……私は吉信ご主人様の犬の北井真美です」

野性の勘か、北井さんが一番怯えている

「まあ……アレだ

取り合えず中入ろうぜ」

先輩が切り出して僕等は佐野家（恐怖の館）に入って行った……

凄い人もいたもんだ……（後書き）

みもり登場シーンの時に勇にキスさせようと思ったけど、めんどくさいから止めた

2011年 暑中お見舞（前書き）

ヤンデレ篇の途中ですが
僕Sキャラからの暑中お見舞です。

2011年 暑中お見舞

暑中お見舞申しあげます。

暑い日が続きますがいかがお過ごしでしょうか？

僕は最近、北井さんとマルコさんが家に居候してますので暑さ以外でも頭が痛いです。もうホント迷惑です。もう勘弁してって目をしてもハアハアしだすしホント困ったものです。

まあそれはそうと、皆さんも水分補給をよく取ってこの夏を乗りきって下さい。

赤松吉信

暑中お見舞申しあげます。

吉信ご主人様の忠実な犬の北井です。

本当に今年は暑いですね。

こんな暑い中、自●をすると色々な意味でイってしまいそうになります。

最近のご主人様の視線はとても冷ややかでとても興奮します。冷ややかなのに興奮して暑くなるってのもおかしい話ですね。

まあとにかく皆さんがんばって今年の夏に打ち勝ちましょう。

北井真美

暑中おみまい田しあげます。

いや、ホント今年は暑い！

気が変になる！

やっぱりこの夏は海にでも行こうかなあ、目の保美にもなるし♪

んじゃ俺は忙しりもんだからじゃなく♪

澄田筭

暑中お見舞申しあげます。

西瓜等が美味しい季節になりましたね。

私個人としてはお刺身が食べなくなる季節ですね。

さて、皆様は、日本古来の陰暦では今は秋だという事はご存知でしたか？

陰暦では夏の期間は四月～六月までで終わってしまうのです。現代と古代の季節の違いは不思議な物ですね。

余談ではありますが、私が只今この暑中お見舞を書いておりますのは七月十一日です。七月十一日といいますと、かの有名な松尾芭蕉は高田と金沢の間といった所でしょう。私も北井お嬢様にお暇を頂き箱根温泉に来ておりますが、なかなか良い句ができません。

数々の名句を残した松尾芭蕉は本当に尊敬に値します。

少々長すぎましたね、それでは皆様、この猛暑、がんばって乗り越えましょう。

最近あまり出番の無い私ですが、かげながら応援しております。

マルコ・XV・桜井

暑中お見舞申しあげます。

まあなんだ本編ではまだチラッとしか出てない俺だが、何かアレが
あーだからコレ書く事になっちゃった……

ま、いいか、暑中お見舞関係ねーけどちくくら俺のグチを聞いてく
れ、拒否権は無い残念だったな

まあ本編見てくれりゃ解ると思うが、俺には俗に言うヤンデレ妹が
いる。

ハッキリ言って泣きそうだ。

アイツのせいで俺には生傷が絶えない。

それに彼女はおろか女友達すら出来ない。

俺だって妹以外の女の子と話したい、もっと言うならイチヤイチヤ
したい、願わくばSE

いや何でもない
上の赤いのは血とかじゃ全然ないですよ。

俺は今でも大好きな妹とラブラブ街道爆進中で超幸せだぜ！！

この夏は、みもりとあんな事やこんな事して過ごそうと思うぜ！！

みもり大好きみもり大好きみもり大好きみもり大好きみもり大好き
みもり大好きみもり大好きみもり大好きみもり大好きみもり大好き
みもり大好きみもり大好きみもり大好きみもり大好きみもり大好き
みもり大好きみもり大好きみもり大好きみもり大好きみもり大好き
みもり大好きみもり大好きみもり大好きみもり大好きみもり大好き
みもり大好きみもり大好き

佐野勇

暑中お見舞申しあげます。

クズ作者です。

いやゝゝ暑いですね。

皆さんは体調管理しっかりしてますか？

僕はなんか風邪ひいて3日間寝込んでました。

ああ、部活やだ、塾やだ、受験やだ、現実やだ

そんな危ない事考えてる今日この頃。

ま、それはそうと、皆さんこれから『僕S』よろしく願ひします！！！！！

闇コロ

2011年 暑中お見舞（後書き）

取り合えず

乗りきりましたよう。

書き方変えました(前書き)

ギャグ小説として、この話は正解なのか？

書き方変えました

恐怖の館（佐野家）の中ははなかなか綺麗だった
というか、ヤンデレ妹は基本、掃除とか洗濯とか料理とかが上手と
いうか、しっかりやるものだ……
とりあえず、今僕らはリビングに居る

み「今、お茶を用意しますね」

とみもりちゃんはお茶を用意をしている
え？地の文と台詞の間に余裕が出来た、台詞の前にキャラの頭文字
が付いたって？

前回まではホント読みづらかったから作者が変更したらしい……

笄「そっれにしても、みもりちゃん可愛いね〜
是非是非付き合いたい!!」

吉「そればかりですね……」

勇「というよりも……あのみもりを一体どうやってものにする積も
りだ？

なんか作戦とか有ったら手伝うぞ」

笄「……………」

やはりノープランかよ……

み「お茶で〜す☆」

あ、そうこうしてる内にみもりちゃん帰ってきた。

みもりちゃんは全員にお茶を配る……………先輩のお茶からは何か変な臭いがするような気がするけど……………

先輩もそれには気づいたらしく

勇「な……………なみもり……………何かお茶から妙な臭いがするんだが？……………」

み「しないよ、臭いなんて……………」

おおっと…今、何かみもりちゃんから鬼●し篇のレ●、魅●を思わせる雰囲気……………

あるえ？僕、雛見●●候群、発症しちゃったかなあ？

まあ、それはそうと、笄はみもりちゃんが先輩に渡したお茶の臭いを無視して、とりあえず、みもりちゃんに話しかける

笄「ねえねえみもりちゃん、ちよつといい？」

み「？何ですか？」

笄「いやさあ…さっきからみもりちゃんの事でずうーっと気になってた事があるんだけど？」

み「はあ…何でしょう？」

おお！流石は笄、とりあえず話を繋げる事には成功している。

伊達にナンパしまくってる訳じゃあ無いようだ

笄「えくくじゃ聞くよ、みもりちゃん、君って何処が一番感じるの

「？」

ガンッ ドガッ

前言撤回……

僕と先輩の拳と蹴りが筈に後頭部と脇腹に直撃する

ナンパと言うよりセクハラだろ、アレ

真「ご主人様、私にいい作戦が…（小声）」

おお…今シリーズでは何か影が薄い北井さん（天才）からのアイデア、

とてつもなく不安だけど、頼りになりそう

真「やっぱりここは、みもりさんを変えるのではなく、勇さんを変えてみてはどうでしょう（小声）」

吉「何となく的得てそうですけど、具体的には？（小声）」

真「ご主人様、ご主人様が勇さんを調教して、とんでもない変態に
してしましましょう

私はどんな変態なご主人様も受け入れますけど（小声）」

吉「却下です（小声）」

勇「いや、案外それは良いかも…（小声）」

吉「先輩！聞いてたんですか！？
ていうか先輩って……（小声）」

勇「違げーよ！要は俺が変態演じればいいんだろ（小声）」

み「お兄ちゃん……何話してるの？」

ぎよぎよぎよ（↑さ……●くん？）

みもりちゃん、先輩の声聞き取れた！！

流石ヤンデレ……

勇「い……いや……何でもないのです、みー、にぱー☆」

気色悪ッ！！

てか梨●ちゃん！？

真「でも、あれは良いかもしれませんよ、幼女キャラの真似なんて
キモい通り越して痛いですし（小声）」

吉「いや……これはミスですね……（小声）」

見ると先輩が笄の強烈なアップアの餌食になっている

ヲタ怒らすと恐いなあ

だが、次の瞬間、僕、北井さん、笄、先輩は驚愕した……

み「……………お兄ちゃんに何してるんだ？」

ザシュ

舞う血飛沫……………

何と筭はみもりちゃんが懷に仕込ませてた鉋（↑仕込ませられるかあ！）により肩辺りを斬られた

筭「なあああああ！？」

吉「筭いいいいいい！！？」

勇「てか何してんだ！みもり！！？」

真「やっぱりヤンデレは鉋ですね」

筭「言ってる場合かあ！！！」

吉「案外大丈夫そうですね」

筭「いやいやいや」

取り合えず僕は北井さんに押し付けられた布（北井さんは僕に目隠しプレイをさせるつもりらしい）を傷口に巻き付ける

勇「オマツ！何考えてんだ！！
みもり」

み「何って、お兄ちゃんに害を成すゴミをお掃除しようとしただけ

だよ」

みもりちゃんはニッコリ微笑む

や……やべええええええええええええええええ

み「お前達もそうだろ……………」

どうせ、私とお兄ちゃんに何かする気だろ……………」

みもりちゃんはこちらを見て言う

やべええええええええええええええええ（パート2）

●見沢症●群末期患者だよ……この人……

み
「殺す」

みもりちゃんは鉈を持って近付いてくる

吉「い……………いや

ギャグ小説で人死にはちよつと」

筭「いや言ってる場合じゃねーだろ！」

み「……………死ね」

吉「！」

鉦が僕に向かって振り下ろされた……………
僕は咄嗟に目を閉じた

ドッ

そんな音が聞こえた

だが不思議な事に、痛くも痒くもなかった。

目を開けると先輩は目の前で崩れ落ちた所だった

バタンッ

吉、筈、真、み「「!!?」」

咄嗟の出来事に何が起きたのか、すぐには解らなかった

もしや先輩は僕を庇って……

僕の考えそこに辿り着いたが早いかな、みもりちゃんは小刻みに震えだす。

み「嘘……だよな？」

お兄ちゃん……

わ……………私、お兄ちゃんを……………

いやあああああああああああ！！！！！！」

みもりちゃんは先輩を殺してしまった事に気付き、ショックでうずくまる

み「嫌、嫌、嫌！！！！」

私のせい！私がお兄ちゃんを？

ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさい！！！！！！」

笈「ま……………マジで？」

真「そんな……………」

吉「先輩……………」

勇「（ギロツ）何だよ勝手に殺すな」

吉、真、笈「ぎやあああああああああ！！！！！！」

い……………生きてたあ！？

てか、いきなりの睨み付け恐ッ！！

み「（バツ）お兄ちゃん!!」

みもりちゃんは先輩に抱き着く

勇「があああああ!

痛いッ痛いから!!

みもり! 一応俺、斬れてるから!!

デカイ傷口あるからあ!!!!!!」

み「!ごめんなさい
今退きます」

みもりちゃんは先輩から離れる

吉「先輩、大丈夫なんですか!?

鉦で斬られましたよね?」

勇「大丈夫な訳ねーだろ

まあ、アレだ、伊達に裏で『黄金の魔弾』とは呼ばれて無いって事だ」

吉「シユールな名前の鶏みたいな通り名ですね」

てか、黄金どこだ?

み「お兄ちゃん……ごめんなさい」

勇「オメーは暴走し過ぎだ

愛が歪んでんだよ、

いいじゃねーか、少しは俺にフリーダムな時間をくれてもよ
いくら俺でも、人殺しを好きにはなんねーよ、みもりは多少自制心
を持って

暴走さえしなきゃ、結構いい女なんだからよ」

み「……………うん」

勇「分かったらな今すぐコイツ等に謝れ、あと、今日は冷や麺が食
べたいな」

み「……………色々迷惑をかけて、ごめんなさい」

箕「うし、許す」

早ッ！！

箕、斬られたのに早ッ！！

懲りて無いなコイツ……………

吉「まあ…………程々にね」

真「私も良いですよ」

その日はなんやかんやで冷や麺おごって貰い解散した

死なくて良かったあ

翌日

吉「どうしました？先輩、げっそりしてますけど？」

勇「いや……アレだ……昨日みもりに『いい女』なんて言ったのが間違いだった……

俺の冷や麺に睡眠薬入れて、眠気を襲おうとしてたらしい

とりあえず逃げてたら朝になってた」

吉「あらら」

書き方変えました(後書き)

遅くなってすみません、

閤コロです、

やっと部活が終わりました……

そして夏休みになりました

でも投稿スピードはどうなるのだろうか………

感想、意見等がありましたら是非

荒らしはNGで……

キャラ紹介

佐野勇、佐野みもり（前書き）

キャラ紹介

キャラ紹介 佐野勇 佐野みもり

佐野勇

(17)

身長 海外の平均的なバスケの代表選手の中で一番小さい人レベル

誕生日 6月20日

学力 下の上

運動神経 凄い

適当な先輩、苦労人？ケンカは凄まじく、作中でもあった様にヤクザに絡まれても平気、むしろ絞め返した、それによって、今では柳田組のお偉いさんとも仲良くなり、若頭とも盃を交わした仲だった
りする

短所は遊び人って所

佐野みもり

(14)

身長 平均的

誕生日 2月1日

学力 学年五位以内

運動神経 ハ●ヒレベル

勇LOVEのヤンデレ妹、家事等は完璧、色々あったがまだヤンデレは治ってなく、多少自制心を持てる様になった、美少女、髪型はツインテール

短所 ヤンデレ

澄田家の事情（前編）（前書き）

あー

すみません！

夏休みなのに全く更新出来なくて

多分後編も遅くなる模様

澄田家の事情（前編）

みもりちゃん騒動から、一週間たった、もう夏休み……………やっ
と夏休みかぁ

今日も今日とで暇な日常を存分に楽しんでる所存だ

ばらびろぽればら

電話だ…（逃●中風）

吉「もしもしドナ●ドです」

『違うだろ、吉信』

吉「……………なんですか？ 筈」

筈『ああ、吉信、今暇か？』

吉「これ以上無いくらい暇です」

筈『北井さんは？』

吉「何か一旦会社に戻るとの事です」

筈『あーそーいやご令嬢だったな』

吉「……………で？ 用件は？」

笄『宿題写させてくれ』

吉「嫌です」

毎年そうだ

笄『たーのーむー』

吉「……………ハア……………写させはしませんが一緒にやる位ならいいですよ」笄『やる……………吉信、俺にはそっちの気は無いぞ?』

吉「シバくぞ?」

笄『悪かった』

てなわけで澄田家
ここに来るのも久しぶりだ

ピンポーン

普通過ぎるチャイム、この音を最初にチャイムの音にしたのは一体

誰なんだろう：

なんてどーでもいい事を考えてたら笄が出て来た

笄「よく来た☆」

吉「来てしまいました」

笄「ささ、早く課題を」

吉「写させはしませんよ」

暑いから僕は早々に笄ん家に入る

吉「あ、そういえば弥美ちゃんは？」

笄「え、家にいるぜ」

弥美ちゃんとは、笄の妹だ、名前だけなら前に出た筈だから、読み返しとくよう

「居て悪かったわね」

突然の声

マンガ、ラノベのお約束

吉「あ、弥美ちゃん、お邪魔してます」

弥「ちゃん付けしないでよ！うっとーしい」

吉「はあ、すいません」

何だか僕は弥美ちゃんに嫌われてる様な気がする……いや、間違えなく嫌われてる

笄「やれやれ、弥美はマジでツンデレだなあ」

弥「五月蠅い！黙れ！馬鹿兄貴！！」

笄「あーあー恐い恐い、そーいや弥美、コミケどうだった？」

弥美「関係ーねーだろ！」

弥美ちゃんはマンガを書いている
同人誌だ

どうやら弥美ちゃんは俗に言う腐女子らしい
因みに作者はコミケをよく知らない

弥「兎に角、今、書いている途中だから入んなよ！」

と言って弥美ちゃんは部屋に入ってしまった

吉「相変わらず仲いいんですね」

笄「いや、どこが？アイツ中々心開いてくれんのだよ」

吉「この世の女性ならそれも当たり前っちゃ当たり前ですけどね……」

澄田家の事情（前編）（後書き）

受験なんて滅べばいい

澄田家の事情（後編）（前書き）

1日で作った

いやゝ勉強しんどい

澄田家の事情（後編）

さて、勉強、勉強

読者の皆さんからしたら「え？今更？」てなモンでしょうけど、それは作者がこの小説に全然、手を付けてなかったからであり、決して追い込まれてる訳ではない

だが、それでも笄の宿題の進行速度は異常だ、

だって何もやってないもん

吉「……取り合えず、数学の課題、ちょっと自分でやってみて下さい」

笄「写させてくれ」

吉「まずは自分で解いて下さい」

笄「無理」

吉「即答ですか……」

ガチャ

ドアが開き、弥美ちゃんがリビングに人数分の麦茶を持って入って来た

笄「おれ？弥美、マンガ描くんじゃ無かったん？」

弥「……ネタに詰まった」

笄「あらら」

吉「そういう笄は中学レベルの問題に詰まっていますけどね」

笄「吉信うやっぱお前、ドSなんじゃないか？」

弥「兄貴が馬鹿なだけでしょ」

そう言って弥美ちゃんは笄に麦茶を渡す

笄「サンキュ、てか何だ？今日はやけに優しいな？」

笄がオヤジ臭くニタリと笑う

弥「黙れ糞尿兄貴」

笄「いくらなんでも酷すぎるッ」

ああ、確かに糞尿でも間違いは無いな
存在が

こういう事を考える時点で僕はノーマルじゃないのだろうか？

否、笄が糞尿、いや吐き溜め、肥溜めレベルと思うのは逆にノーマ

ルだ

よって僕はノーマルだ！

そんなことを考えてると、弥美ちゃんから麦茶が手渡される

吉「あ、ありがとう弥美ちゃん」

弥「ッ！！……………」

？何故黙り込む

そして何故睨む、更に何故赤くなる？

そんなに嫌われてるのか？僕

弥「……い、言っとくけど、ただの気まぐれなんだからねコレは！
」

まあそうだろう、兄の友達に何も言われずお茶を持ってくる妹の動機など大抵が気まぐれだ、というより気まぐれでもこんなにも嫌っている僕にお茶を持ってくるなんて、意外と優しいんだよなあ弥美ちゃん

僕が麦茶を受け取ると弥美ちゃんはリビングの端の方の椅子に座りマンガを読み始める

それから、僕は筭に数学を教える地獄に見舞われた

何故地獄か？

それは何度教えようがたちどころに忘れる筭にひたすら数式を覚え

込ませるからだ

一体何度同じ事を言っただろうか

途中弥美ちゃんが何度もこっちを見てきて、目が合うとキツと睨んでくるのも精神的に堪えた

まあともあれ、因数分解と二次方程式を覚えたので良しとしよう（中学レベル）

吉「……じゃ僕はそろそろ帰ります」

僕がそう言うと何となく弥美ちゃんが寂しそうな顔をしたが気のせいだろう

筈「ああ、もうこりごりだ

俺はもうちつと楽しい勉強会を期待してたのに」

吉「そういうのは作者とやって下さい、作者も、やっと二次方程式覚えた所らしいんで釣り合いますよ、多分」

筈「よろこん」

ガンッ

バキッ

吉、弥「「キモい」」

ハモった

笄「セーコーコノヤロー!!」

さー無視無視

僕は荷物をまとめ、立ち上がる

吉「じゃ笄、弥美ちゃんお邪魔しました」

笄「おうおうケーレケーレ」

吉「笄、もう二度と来ませんよ、そんな態度取ると」

僕がそう言っていると弥美ちゃんが顔を真っ赤にして

弥「バカ…たまには来てよね、麦茶くらいならいつでも出してあげるから…ってべ、別に来て欲しいって訳じゃないのよ!!そこんどこ誤解しないでよね!!」

そう言っで弥美ちゃんはダッシュで自分の部屋に入ってしまった

吉「……………???」

なんだかイマイチ良くわからなかったが、取り合えず、近い内にまた来るかと思った

吉「では、僕はこれで」

ボタンッ

と僕は扉を閉めた

北井グループ本社、地下12階立ち入り禁止施設

そこには真美、マルコを含む七人が席に座っていた

「で、今日は一体何の用だい？ご令嬢さん」

と言うのは赤髪に深々と帽子を被る40近い男、この街に君臨し、同盟関係を結んだ四大家族の一つ、神楽組の鳳凰の政吉と恐れられる若頭、カグラマサヨシ神楽政吉その人だった

他の四人も気になってたらしく視線を真美に向ける

真「今日お集まり頂いたのは他でもありません、遂に『あの装置』が完成しました」真美がそれを言うと皆、一斉にざわめきだす

「まさか、あんな非常識な機械を作るとは、流石、真美さんですな」

そういう引き締まった老人は最早国をも多少動かせる政治家、
松崎^{マツザ}
大悟^{キタイゴ}だった

真「ええ、完成しました

まだ実験段階ですがすぐにでも使えるものです」

またしても場がざわめきだす

そのざわめきの中、真美はニヤリと笑った

澄田家の事情（後編）（後書き）

ホント感想、ダメ出し、意見、質問お願いします

質問は前書き辺りに書きます多分（あくまでも多分）

執筆また遅れたなあ…… (前書き)

WORKING!!、めだかボックス、戦国スレイズにハマりまく
ってる今日この頃

執筆また遅れたなあ……

『昨日未明、埼玉県さいたま市にて日本刀を持った男が町を徘徊、通報を受けた警察が事情を聞こうと近づくと男は逃亡し行方を眩ましました』

朝のニュース

それは、大抵どのチャンネルでも同じ様な事を放送し「はあまたこの話題かよ……いい加減内容覚えたよ…」等の飽き飽きした感情を視聴者に抱かせる存在である

嘘である

朝のニュースとは

朝一に現在の社会を知る為の無くてはならない存在である

吉「埼玉県さいたま市って近所じゃないですか、恐いですねえ」

初公開、吉信達の住所はさいたま市にあった！！

（いや、勿論実際には吉信達は住んで無いぞ、この物語はあくまでフィクションなのだから……）

吉「それにしても、このご時世に日本刀男出現なんて、ある意味凄い人ですね、まだ春でも無いのに」

真「（ガクガクガク）そ……そう………ですネ」

吉「？、何だろう北井さん、やけに動揺しているような……
夏休み中、一回も出番無くて、影が薄いとまで言われたショック状態から、まだ立ち直れて無いのかなあ」

吉「北井さん、どうかしました？」

真「（ビクッ）いッいえ……何でもないです」

吉「（はーん、何か隠してるなこりゃ）」

吉「信はあまり鋭い方では無いが、行動がいちいち大胆過ぎる真美と取り合えず同居しているので真美の多少の変化ならお見通しなのだ」

吉「北井さん、何か僕に隠し事とかしてませんか？」

真「い……いえ何も……」

吉「嘘だー！（一度言ってみたかったんだよなあ）」

真「（ビクビクッ！）すみません…ご主人様、何か隠してます…」

吉「やっぱり…それで、どうしたんですか？」

真「い……いやあ…それはちょっと…」

吉「言っして下さい……（ゴゴゴゴゴ）」

真「……はあい／／／」

逆らえないのが真美だった

真「実はさつきニュースでやってた日本刀を持った男にちよつと心当たりがあつて……」

吉「えゝえゝ」

真「実は先日、幾年もの研究によつて遂にとあるマシンを私は完成させました……」

吉「とあるマシン？」

吉信は嫌な予感がした

真「TTAS……俗に言うタイムマシーンです」
タイムトラベルアポーツシステム

吉「————ツ」

吉信絶句

吉信（ううわあゝゝゝ流石北井グループ、やる事の規模が違ふ）

吉「……で？ 一体どうしてそんなもん作つたんです？ 錬金術の如く歴史の闇に葬られてしまうのがオチですよ」

真「いえ、それは別に構いません

『TTAS』それはその名の通り過去の人物、物質等と呼び出すマシンです

私がTTASを作つた訳はただ一つ、それは……」

吉「それは？」

真「マルキ・ド・サド召喚です」

ゴンッ

吉信は思わず手元にあった鈍器のような物を真美に振り下ろす

真美「あひっ」

吉「バカですか！馬鹿ですかぁ！！？」

動機が下らなすぎなんですよ、マルキ・ド・サドってあの作家さんでしょ、昔の」

真「馬鹿、馬鹿、馬鹿……ハアハアハア」

吉（駄目だコイツ……早くなんとかしないと…）

なんだかんだで三分後

吉「で、初代ドSを呼び出し、僕の代わりにアブノーマル関係を築こうと？」

吉信はもう既に呆れ顔である

真「い、いえ！違います！！

私のご主人様はアナタ様だけです！私はご主人様一筋ですッ！！」

吉（嬉しくない……）

普通は嬉しいモノなのになあ

コイツホントに男かあ？

吉「作者は黙ってて下さい、そして作者なんだから自分の作ったキ
ャラの性別を怪しむな」

真「ご主人様？どうかいたしました？」

吉「いえ…何でもないです……

ていうかそれじゃあ何故マルキ・ド・サドを？」

真「ご主人様にSの快感を学んで欲しかったんです」

吉「嫌です（キツパリ）」

まあ、そりゃ断るだろう

真「……」

吉「……なんとなく話が逸れてますね

それで、そのマシーンとさっきのニュース、どう関係あるんです？」

真「…ハイ、それが…マルキ・ド・サドを呼び出そうとしたら時間

軸等を間違えて江戸時代の榎戸佐外助マキドサドスケという侍を呼び出してしまつて……あまつさえ逃げられてしまつて……」

吉「てことは、ニュースの日本刀男って……」

真「ハイ、十中八九その人です」

町

「ありがとうございました」

本屋にて、マンガ（W O ● K ● N G ！、黒執●、悪●召使の三冊）を買い、自宅に帰ろうとしているのは肥溜め星人……もとい筭の妹である弥美だった

弥「まさか、悪●召●がもう単行本で出るとは…流石に懐が淋しいわね……」

まあ、大抵のマンガ好きにはよくある事だ
弥美がふと、反対側の道路を見ると、そこにはデビルエンジェル（ツンデレ喫茶）という店が建っていた

弥「ツン……デレ……」

『弥美はホント、ツンデレだな』

『たまにはデレでも見せれば？』

『オメーのツンはどちらかというとグサッなんだよッ!!』

全部筈が弥美に言った台詞だ

弥「／／………わ…訳分かんない…」

そんな乙女に黒い影が近づいて来た…

執筆また遅れたなあ……（後書き）

1
ヶ月

返す言葉もありません……

ホントすいません……

「せんせーい、五目チャーハンはおやつに入りますか？」 「ぐぐりな」 (前

タイトルに特に意味は無い

珍しく弥目線だ

ハッピーバースデーテューミー♪

「せんせーい、五目チャーハンはおやつに入りますか?」 「ぐぐりな」

ツカツカツカ

弥美は違和感と視線を感じ足取りを速めた

ツカツカツカ

弥美「……………（バッ）」

思い切って後方を確認、そこには背の高い中年男性がニンマリと笑みを浮かべていた

弥美（キモい!!）

弥美は更に足取りを速める

すると中年男性も歩く速度を速め弥美について来た

弥美（何? 何!? 恐いッ!）

ガッ

弥美（!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!）

男が弥美の肩を強く掴んだ

男「ハア……ハア……お嬢ちゃん……何で逃げるんだい?」

男は息を荒立てながら言う

弥美「ちよっ、誰よ！アンタ！？放せよ」

男「お嬢ちゃん……僕の事、好きなんでしょ？知ってるんだよ……前のコミケで目が合ったじゃないか……好きなんだろ？好きなんだろ？何で逃げるんだよ」

弥美「しッ知るか！！アンタなんか！！放せ！変態！」

弥美はもがくが男は放すどころか弥美の手を強引に掴んだ
町中とは言えあまりここは都会の方では無いので人通りも少ない
よって、誰も弥美の事を助けようとする人はいなかった

弥美（……ヤバイヤバイ……誰か……助けて……吉信）

ドッ

突然、男の手が弥美の手を放した

弥美「！！」弥美はすぐに男から離れる

男の方を見ると男は苦悶の声を上げ手を押さえていた
謎の光景だった……

何故なら手を押さえる男の隣には侍のコスプレをした男が刃を返した刀を構えていた

こなんてカオス……
弥美

男「お……お前ッ！な……何するんだ！！」

侍「俺はただ、嫌がっている娘を助けたただけだ、貴様はその娘の何

だ？」

侍は弥美を庇う様に弥美の前に立ち男を睨む

男「ッ…じゃ…邪魔するなああああああああ！！！！！！！！！！」

男は侍に向かって拳を振るうが侍はそれを軽く避け刀の峰を男に打ち込む

男「……ッ」

男は声を出すヒマも無く無様に倒れた

侍「まあ峰打ちだから問題ないだろう……」

侍は刀を収める

一部始終見ていた弥美は、ポカンと口を開け、立ち尽くしていた

侍「娘、怪我は無いか？」

弥美「え！？あ、はい」

侍「そうか、それは良かった…ところで、勢いで伸してしまったが、あの男、娘の知り合いじゃないかな？」

弥美「ちッ違うわよ！！ただの変態ストーカーよ！」

侍「す……ストーカー？とは……何だ？」

弥美「え？ ストーカー？ アレでしょ？ コソコソと人付け回す奴」

侍「ああ、忍の事か……初めて見たぞ、案外弱いのだな」

某お笑い芸人のコント並に噛み合わない会話、流石に弥美も侍をただのコスプレとは思えなくなってきた

弥美「アンタ、一体何者？」

侍「？ 俺は榎戸佐外助。ただの平侍だ……団子屋に行こうと町を歩いていたらいつの間にか変な屋敷に着いてなあ、ふらふらしてたらこの様なおかしな町に出たんだ
すまぬが、ここは何処だ？」

弥美（え〜と……こういうのを世間では『電波』って言うのよね
…）

弥美は少し考えて

弥美「助けてくれてありがとう、残念だけど力にはなれそうに無いから他を当たってじゃ」

スタスタスタ

逃げる事にした
すると

ガシッ

佐外助「待って！ねえ待ってよ、お願い！昨日から俺、何も食って無いのー！！何故か俺の金は使えないし、責めて何かおごってええええええ！！」

ギャグ●ンガ日●の芭●さん張りに佐外助が引っ付いてきた

弥美「うわッ何コイツ、ウザッ！！曾●くんの気持ちがよく分かる！！」

佐外助「俺は団子屋に行こうとしてたのに団子処か佃煮すら食えないなんて不幸過ぎるッ！

恩を返せー！」

弥美（ああ、コイツからノミ兄貴と同じモノを感じる……）

確かに

弥美「……確かに、助けて貰ったのは事実だからしょうがない……何か奢れば良いのね、分かったわよ（ああー更に金があー）」

佐外助「本当か！？いやー良い娘だ…嫁に欲しいくらいだ」

弥美「全力で断る」

「せんせーい、五目チャーハンはおやつに入りますか？」 「ぐぐりな」 (後妻

感想プリーズ

ハ●テのごとく!と魔法先生ネ●ま!の映画に紛れてさよなら絶●先生も映画化

特に無え

ハ●テのごとく!と魔法先生ネ●ま!の映画に紛れてさよなら絶●先生も映画化

真「行きましょう」

吉「あ、やっぱり?」

状況説明

真美がマルキ・ド・サドを呼び出そうとして間違えて槇戸佐外助という侍を呼び出してしまった。

あまつさえ佐外助という侍が町へ逃げてしまい現在ニュースで話題
沸騰中

流石に何とかしなければ……て事で現在に至る

真「このままほおっておくと何かと危険ですし、そうなれば北井グループの株は失墜します」

吉「でしようねえ（はぁ面倒くさい…どうせこのノリだと付き合わされるんだろうな…）」

真「という訳で行きましょう」

吉「……………分かりました、付き合いましょう（どうせ断っても無駄だろう）」

＞吉信は面倒くさがって諦めた（チャララチャツチャツチャー―）

真「では、ご主人様私はお化粧をして来ますので少々お待ちを」

吉信は外見に気を使ってる真美の様子を見て（ああ、意外と常識的

な所というか、一般女子的な所もあるんだなあ）と思いながらお茶を煎れて待つ事にした

数分後

真「お待ちせしてごめんなさい！！」

真美は隣から部屋に入って来た、それはそれは見事な縄化粧をして

縄化粧？

吉信は入れたての上質なお茶を思わず吐き出した

吉「ガボツゴホツ………なななななな何なんですか
その服装！！？」

真「縄化粧です、ご主人様！」

吉「じょっじょじょ…女性なんだからもっ、もっと恥じらいを持って下さいよ北井さん！」

>吉信は混乱している

真「嫌いでしたか？縄化粧」

吉「服を着て下さい！！」

真「照れてるご主人様も素敵です！」

吉「いいから服をきろおおおお！！」

吉信は顔を真っ赤にさせながら真美を部屋から追い出し着替えさせた

数分後

吉「ですが、一体僕達は何をどうしに行くんですか？こんな大事件なんですし警察や北井グループの人だってその佐外助さんを探してる訳ですし、出る幕所か足手まといなのかと」

真「あゝ、だからです、警察はともかく家の社員では佐外助は捕ま

えられないんですよ、さっきから何度も対峙した社員から連絡があったんですが、どれも逃げられたという連絡ばかりなんですよ」

吉「そんなに逃げ足の速い人なんですか？ではますます出る幕は無いような」

吉信が言った時だった

ズドオオオオオオン

吉「!?!?」

リビングにリムジンが激突、部屋突っ込んで来た

吉「ぎゃああああああ!?!何か来た!?!」

ガチャリ

とリムジンのドアが開き、運転手が降りてくる
その運転手とは……

吉「ま……マルコさん!」

そう、マルコさんことマルコ・XV・桜井さんだった

吉「うわあ何か久しぶり」

マ「お久しぶりです」

マルコは吉信と真美にお辞儀をする

吉「……じゃないですよ!! どうしてマルコさんの登場シーンはいつもこう過激なんですか! ? 普通に登場して下さいよ、心臓と家計に悪い……」

マ「申し訳ございません、修理の方は前と同じくこちらがやりますので」

言うがマルコの顔に反省の色は無かった

真「マルコなら、その超人的な眼力と戦闘力で侍の一人や二人逃けた所で簡単に捕まえられますよ」

●バス ●ヤンしかりハ ●テしかりロノ ●しかり執事つてのは必ず超人的なパワーを持っているモノだ。まあセ ●スチ ●ンと ●ノウ ●は悪魔だけど…

真「という訳で行きましょう」

真美はマルコにリムジンのドアを開けてもらいリムジンに乗る

吉「うわー現実で始めて見たーこんな光景……まあここ現実とか小説だけど……てか、やっぱり行くんだ」

吉信もリムジンに乗り込んだ

ハ●テのごとく!と魔法先生ネ●ま!の映画に紛れてさよなら絶●先生も映画化

荒らしとかは止めよう!! (↑分かる人だけ分かれ)

ダメ人間の定義は？（前書き）

なんだと思います？

ガッ

後ろから何か奇妙な音がした
吉信と真美が振り向くとそこには

畑鏡蘭先生が血まみれでリムジンにへばり付いてた

吉、真「ぎやあああああ！！先生え～～～！！」

蘭『おゝめえゝえゝらゝ』

吉「怒ってる……怒ってらっしゃる…最悪、殺されるんじゃないだろうか……」

蘭『慰謝料として5000万払いやがれえ!!』

吉（ええええソツチ？）

蘭『よゝこゝせゝ金をよゝこゝせゝ』

吉「恐えええええ」

マ「とりあえず、止めましょう」

マルコはリムジンを止める

するとすぐに蘭が運転席に飛び付いてきた

蘭「慰謝料よこせ」

マ「申し訳ございません、只今、緊急事態でして、これしか手持ちがなく」

そう言ってマルコが出したのは何とアタツシユケースだった

吉、蘭「ッ！！！！！！！！！」

まあ普通、「これしか」と言いながらアタツシユケース取り出すじいさん見たら誰だってこうなるだろう

蘭（や……やべえ……後部座席に北井と赤松乗ってたからもしやっ
て思ったけど……こりゃラッキーかも……搾り取れるだけ搾り取
れるかも……）

腐った人間だった

蘭「ふッ…フンッ！た、たかがアタツシユケース一つで良いわけ無
いだろ、こ…ここはアレよ…この五倍出したら許しやろうか」

ヤクザの手口ですね、わかります

マ「ですが、今は緊急事態……」

真「だったら、先生、これから私たち、侍ハントしに行くんですが、一緒に行きませんか？もし侍ハントに成功したら盛大なパーティーを開く予定ですので」

吉「え、！？正気ですか？北井さん、あんな反面教師を仲間にして、それにパーティーってアレでしょ？さっき小説外で言ってた佐外助返却記念パーティーを僕ん家でやるってヤツ、嫌ですよあんなの家に入れるなんて（小声）」

真「大丈夫です、ご主人様私とご主人様の愛の巣には入れません、適当に誤魔化しますから、それに、時速315kmのリムジンに跳ねられても無事な鋼の肉体、マルコ以外にもいた方が得ですよ（小声）」

吉「そうですか……ってか誤解を生む様な事言わないで下さい（小声）」

蘭（パーティー……酒……金持ち……美味いメシ……いい男……真夜中のたった二人の二次会……）

蘭「行きます」

聖職者あるまじき妄想の後蘭はリムジンに乗り込んだ

>蘭が仲間になったチャラチャツチャツチャー

吉「え……え……」

吉信は露骨に嫌な顔をした

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

吉、蘭 「ぎゃあああああああ!!」

絶叫が二つになってもう数分になった

蘭 「ぎゃああ、な…成る程……そういう訳ね、ぎゃああ!!」

吉 「ぎゃああ、はい、要約するとそんな感じです、うわあああああ
マルコさん!急に曲がらないで下さいッ!」

マ 「申し訳ございません」

吉 「こんな速度だと、また誰か跳ねますよ!」

ヴウウウウウウウウウ

道路交通法完全無視なリムジンは尚、さいたま市を駆け巡って行った

『お兄ちゃん大好き♪ お兄ちゃん大好き♪ お兄ちゃん大好き♪』

「……………」

携帯から発せられる妹の声、
着信音だ…

漢 佐野勇は辺りの通行人に白い目、軽蔑の目で見られ 頭を抱えていた

勇（みもりめ……また着信音を勝手に変更しやがって……あー出るのヤダ、更に変な目で見られそうだ…）

『お兄ちゃん大好き♪ お兄ちゃん大好き♪ お兄ちゃん大好き♪』

鳴り続ける着信音

勇「チツ…しゃーねーな」

ピッ

勇「はい、もしもし、どこの誰だ？」

『あゝ勇ゝゝまた下がへマしたゝゝ今、真中組の連中十二人に絡まれてんのゝゝ助けてゝゝ』

イラッ
勇

その声はただでさえイラついている勇に更にストレスを与える声だった

勇「んな下らねえ用事で掛けてくんない！なんなら前の決着付けてやろうか！？」

『えゝゝ恐い事言わないでよゝ』

勇「十人や二十人、テメエでなんとかしやがれ！んじゃ着るぞ」

『あ、待って』

勇「アゝアゝ？」

『政吉情報なんだけどさあ……どうも最近『玄武』の兄ちゃんが動いてるみたいなんだよぬ』

勇「ッ………知るかよ、俺あヤクザじゃあねえんだ」

『あ、そ、やっぱりね（ズドドドドド）』

勇「………今の音は？」

『あー電話中なのに皆が五月蠅かったテキトーに潰しといた』

勇「やっぱ俺必要無かったじゃねーかよ（ピッ）」

勇は携帯を切った

勇「あー全く……あの馬鹿が……」

言った瞬間だった

ズドワッ

勇「ぎゃあああああああ!!」

跳ねられた……リムジンに

車内

吉「ちよっとおおお! また誰か跳ねましたよ!!」

マ「ノープログラム、ドントウォーリーです」

吉「いやいやいや、心配しますよ! どうするんですか!？」

ガッ

また、後ろから音が

吉「ま……まさか……」

真「ご主人様、勇さんが張り付いてます!!」

吉「あ、ああ、先輩なら良いか」

勇「なんだ? コラァー」

パリーン

勇は窓（強化硝子）を突き抜け車内に乗り込んだ

勇「テメェコラ赤松う…轢き逃げしようたぁいい度胸だなぁ」

吉「あーヤバイ、先輩マジモードだ」

勇は最早、L5発症並みの顔をしていた

真「やっぱりこの兄妹ただ者じゃありませんッ!」

蘭「待ちなさい」

と止めたのは意外な事に蘭だった

勇「あ、先生か……なんです?」

蘭「いやそれが、カクカクシカジカで……」

勇「はい？カクカクシカジカ！？」

蘭「そ、カクカクがシカジカでカクカクなの」

勇「………しょうがないか……」

吉「通じた！？カクカクシカジカで通じた！？」

真「カクカクシカジカって誰が考えたんでしょうね……」

勇「オイ、赤松、本当に後で俺の部屋にメロー●基地レベルのセキ
ユリティ付けるんだろぅな？」

吉「はい？先生…先輩に何を？」

蘭「なんでも願いを叶えてくれるって」

吉「なんという無茶振りを！？ていうかメロー●基地レベルってア
ンタ家をどうしたいんですか？」

勇「ウルセーみもりが恐いんだ！」

蘭「金銀財宝……！」

吉「ちよっ黙れー！！！」

数分後、

リムジンは五人を乗せて走り続ける（結局、勇も着いてくる事に）
あのスピードで

途中、吉信が一回、蘭が七回、勇が三回ゲロ吐いた、そして真美は
吉信の嘔吐を見て下が濡れたのだった

勇「オイ、作者が何か下品な事言ってるぞ」

吉「まあ事実ですから文句言えませんが大概にしろです」

真美「ハア…ハア…ハア」

真美はまだ息を荒立てていた

吉「よく考えたらさっきからダメ人間ばかり跳ねてますよね」

勇、蘭「ダメ人間言うな」

吉「この調子で行ったら筈辺りも跳ねそうですよね…」

ドンッ

筭は期待を裏切らなかった…が、乗せなかった

ダメ人間の定義は？（後書き）

感想プリーズ！！

GREEN配信分

漢三人の熱き会議室（前書き）

WORKING!! みたく別のサイト（GREEN）で配信していた
話をうPします
会話オンリーです

手抜きで悪いかッ！

GRE配信分 漢三人の熱き会議室

吉信「やっと更新されましたね『僕S』」

勇「全くだ」

吉信「もっと早くならないんですかねえ」

筭「無理だろ、作者に限って」

吉信「ですよ〜」

勇「話は変わるが、コレって宣伝だよな？明らかに」

吉信「そうみたいですな、作者も欲深いですよ」

筭「それを言ってやるなよ」

勇「前から思ってたんだが作者はよくGREで俺達登場させつけどグリ友達で俺等知ってるヤツなんて一人、二人いればいいくらいなんだよな」

筭「あー確かに、初見の人ビックリするかも：」

吉信「一応、何度も自己紹介はしてますけど全員には行き届きませんしね、作者の無計画っぷりがにじみ出てますね」

勇「だな」

吉信「……………」

笄「……………」

勇「……………」

三人「あんま話す事ねえー」

吉信「どうなんでしょうね、このコーナー？」

笄「ぐだぐだ過ぎだよな…」

勇「ていうかコーナーになんのか？コレ」

吉信「さあ？」

勇「さあって……………」

吉信「その辺も無計画ですからね……………」

勇「ふーむ……………」

笄「考えても仕方ないな…」

二人「確かに」

吉信「じゃどうします？もう締めます？それともなんかやります？」

笄「どーしようかね……………」

勇「もういいんじゃない？やること無いし」

笄「ですよね」

吉信「じゃあ締めますか……………どうやって？」

二人「え？」

笄「どうやってって言われても……」

吉信「何か締めるには何かしらしないとダメみたいですよ」

勇「は！？なんだそりゃ！？」

吉信「んじゃ笄の一発芸で……」

笄「無茶振り！？」

勇「じゃ踊れ」

笄「ハイ！？」

吉信「あ、それいいですね、さあ笄、3、2、1」

笄「え、え！？」

吉信「やんなきゃ帰れませんよハイ、3、2、1ハイッ」

笄「ズンチャンチャカチャン♪ズンチャンチャカチャン♪」

吉信「……………」

勇「……………」

笄「……………」

三人「……………」

GREEN配信分

漢三人の熱き会議室（後書き）

あー楽だ……

サンダーファイヤー、サンダーファイヤー。サンダー付ければ概ねカッコよくち

今回は短め

いや、かなり短い

サンダーファイヤー、サンダーファイヤー。サンダー付ければ概ねカッコよくちとあるデ●ーズ

弥美はなけなしのお金で佐外助に料理^{ステーキ}を奢っていた

佐「……」

弥「……」

だが佐外助は目の前にステーキが運ばれたのにじっとステーキを見つめてるだけで一向に食べようとしな

佐「……」

弥「……どうした？」

佐「いや、その…ノリで頼んではみたが、これはなんて食べ物だ？」

弥「って知らないで頼んだのかよ！？こんな高いの」

佐「どうせ娘の奢りだと思って一番高いのを頼んだんだ」

ゴスッ

弥美は思わず佐外助に顔パンを入れた

佐「ガッ」

弥「コノヤロー絶賛金欠中のいたいけな少女にどんだけ卑しい事を！」

佐「ハッハッハ良いではないか♪良いではないか♪あと良かったらこれの食べ方を教えてくれ」

ガスッ ドスッ ゴスッ

弥美はもう3、4発殴り付けた

弥「ステーキ知らないなんて何処の●ヤテだ、何処の明●だ？」

いや、●久は食べたことあると思うぞ、両親がいるときとか

佐「素敵？素敵な食べ物なのか？これは？」

弥「肉だ、肉、牛肉よ！！何？キャラナリ？侍だから肉食べる習慣ありませんよアピール？はつきり言ってウザイから止めてよね」

佐「や、だからホントに侍なんだってば、あゝ信じてもらえない、これなら証拠になるか？」

ザクッ

佐外助はテーブルを真剣で切って見せた

弥「！！？」

店内の人「！！？」

弥「……………話だけなら聞くわ」

取りあえず弥美は真面目に聞く事にした

俺…………死ぬかもしれない

b y 闇コロ (前書き)

またしても かなり遅れてすみません

そして1ページだけですみません

高校受験の勉強とかであんまり時間取れなくて……

俺の父親 次のテストでいい点取れなかったら殺す

とまで言い出して

嘘とかほとんどつかない父親から言われたらかなりビビります

長くなりました

本編どぞ

俺……………死ぬかもしれない

b y 闇コロ

吉「うゝうゝぎぼぢわるゝいゝ」

蘭「もう無理、二日酔いの五倍くらい気持ち悪い」

勇「もう出すモンなんて何もねーよ、つーか俺元々家じゃ全然飯食えねえから液しか出てねえよ、アレ？死ぬんじゃない？俺死ぬんじゃない？」

ただいま暴走リムジンは吉信等の申し出によりファミレスで休憩兼昼食を取るようになったのだった、だが吉信、勇、蘭の三人はファミレスに入る前に駐車場にてぐだぐだやってた

吉信「ていうかあのジジイただけドライブテクあるんですか事故一つ起こしてないし」

勇「おい、被害者、ここ被害者二人もいるよ」

吉「アンタ等引いてもそれは事故じゃないことに気付きましたそれは世間ではゴミ掃除っていう事に気付きました」

勇「ーーッテメツこら、人権侵害だコノヤロー、やっぱお前、世界最高のドSじゃねーか」

吉「僕はノーマルですよ」

蘭「いや、もう無理だろ」

二対一、吉信には味方がいなかった、というか　ここに真美や筭等
がいても多分吉信の味方になる人物はいないだろう
吉信は一時期流行ったような流行らなかったような『ぐぬぬ』って
顔をした

日頃の行いがものを言うよね

佐「――という訳だ」

弥「はあ……要するに、アンタは本物の江戸時代の侍で団子屋に行
く途中不思議な光に包まれていつの間にかよく分からない部屋に飛
ばされてた、それでその辺フラフラしてたら大勢の人に追われて逃
げてさっきに繋がる……ってのでもいいのか？」

佐外助が現在に至るまでの話を弥美にすると弥美は戸惑い8割、驚
き2割　というなんとも微妙な感じになったが　取りあえず理解は
したようだ

弥美「やっぱ信じらんない、そんな逆戦●スト●イズ」

弥美や作者の様な人種の人はポギユラーなクレ●ンし●ちゃんより
微妙にマイナーな漫画の方が先に出るのである

佐「娘の話からするに、ここはどうやら未来の世界ってところか…」

弥「ま、そんなところね」

佐「いやゝまさかあの天下の徳川の時代が終わるとは…実に興味深い時代だ」

佐外助は目を輝かせて外を見る

すると、佐外助は外でゲロ吐いてる女性を見つけると

佐「お！？誰かが吐いた、ちょっと俺、助けに行ってくる」

と席を立つ

弥「オイ、待てコラ！」

これが江戸時代の人情なのか　と弥美も席を立ち佐外助を追いかけた

ファミレス入口

真「やっぱりとんでもない事になったわね」

と、随分久しぶりな素の真美が言う

マ「左様でございますな」

真「まさか、マルコの眼力でも見つけれないなんて……」

マ「申し訳ございません」

真「まあ…私のせいでもあるしマルコが謝らなくてもいいけ……！
！？」

真美の目の前に女連れの侍が現れた

俺…………死ぬかもしれない

b y 闇コロ（後書き）

次回

遂に対面

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5677r/>

僕は世界最高のDS！？

2011年12月1日17時49分発行